

単元名「家光の政治を評価する ―歴史から考えるよりよい社会とは?―」

1. 目的・目標・評価規準

本単元では、多角的な視点から歴史的事象を捉え、学んだことを一人一人が自身の生き方に生かしていくことを目的とする。徳川家光が行った政策や当時の人々の暮らしを根拠とし、様々な視点から江戸時代について考察したり、他者と対話したりする活動を通して、歴史から学んだことを今の生活と関連づけて捉えていく姿を引き出したい。

- 家光の政策や当時の人々の暮らし等について各種資料を活用して具体的に調べ、武士による政治が安定したことや不自由な生活を送っていた人々がいたことを理解し、目的に応じた方法でわかりやすくまとめている。【知識・技能】
- 家光の政策や当時の人々の暮らし等に着目して問いを見いだし、江戸幕府がもたらした安定と当時の人々の暮らしを関連づけ、歴史を学ぶ意味について考えたり、適切に表現したりしている。【思考・判断・表現】
- 家光の政策や当時の人々の暮らし等を基に、歴史から学んだことを自分の生活にどのように生かしていくかを考えようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

2. 教科の本質と教材について

社会科は「一人一人の人間が主体的に個性をもって生き抜くことができる世界を創るため」の教科である。その子らしい学びを支え、個と個がお互いを刺激し合い磨き合っていく中で、よりよい自分の生き方について自覚的になれるような学びを目指したい。

本単元で取り扱う江戸時代は、260年余り続いた「太平の世」と呼ばれる時代である。「戦いがあることが一番の不幸」と捉えている子供たちは江戸時代を肯定的に捉えることが予想される。その一方で、特権をもつ武士によって厳しく支配された人々がいたこの時代は、全ての人に自由が保障された世の中ではない。多角的な視点からの学習を通して、歴史学習には「繁栄の裏にある支配」や「平和の裏にある不自由」といった現代につながる諸問題を解決していくためのヒントがあることを実感し、自己の生き方について問い直す姿を引き出したい。

3. 子供の実態（抽出児）と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

本実践では、⑦②⑦の3名を抽出児として設定する。⑦は農業を営む両親に影響を受け、農業という仕事に誇りをもっている児童である。学習を通して江戸幕府の繁栄の裏で不自由な生活を強いられた人々がいることに気付き、自身の生活経験と関連付け、支配された人々の立場からの発言を期待したい。②は普段の生活や学習時に排他的な発言が目立つ児童である。本単元の学習を通して「力を誇示することが強さではなく、お互いの権利やその人らしさを認め合っていくことが本当の強さであること」に気付かせたい。⑦は学校行事における運営委員等の経験から自身のもつ理想のリーダー像に悩みを抱えている児童である。太平の世をもたらした家光の政策を様々な立場から総合的に判断し、リーダー像を明確にしていく姿を期待したい。（*なお抽出児の詳細や本時までの学びの様子については、追加資料を参照されたい。）

4. 本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

①「問題解決学習を軸とした単元構想」と「座席表カルテを活用した個の見とり」

授業者が定義する社会科の本質『社会科は「一人一人の人間が主体的に個性をもって生き抜くことができる世界を創るため」の教科である』に迫るためには、重層的で複線的な授業構想が必要である。その子をもつ問題意識を基にした問題解決学習を展開し、自分らしい考えをぶつけ合う中で、より自分の生き方について考えを深めていけるようにしたい。そのためには、「個の見とり」が必要不可欠である。本実践では、座席表カルテを活用し、一人一人の個がそれぞれの時間においてどのような学びを創造しているかを見とるようにする。座席表カルテを活用することでそれぞれがもつ考えや感じ方のズレが明確になり、子供たちにとって切実性のある学習問題が設定できると考える。

②「地域教材」の活用

本実践では、江戸時代に御三家の一角を担い政治の中心的な役割を果たした和歌山の地を地域教材として積極的に活用する。具体的には、江戸時代の様子を感じることができる場所に何度もフィールドワークに出かけたり、私立博物館の学芸員の方に当時の和歌山の様子を教えていただいたりする時間を設定する。地域教材による五感を通した学びには、心をゆさぶる力があり子供たちは大きな歴史の流れの中に自分が生きていることを実感していだろう。自分たちにとって身近な地域から江戸時代を捉えることで、子供たちの歴史に対する理解がより深まると考える。

5. 学習の流れ（全16時間（本時14時））

第1時

徳川家光の言葉「わたしは生まれながらの将軍である。～以下省略～」に出会い、感じたこと等を共有し、家光がどのような政治をおこなおうとしたのかについて予想し、学習計画を立てる。【態】

- ・すごく偉そうで腹が立つ！道長とか清盛のように権力を手に入れたらみんなこうになってしまう。
- ・でも、これだけのことがいえるということはやっぱり徳川の権力がすごかったと思う。
- ・またどうせ支配される人たちは苦しい生活をしたのだろう。家光の政策について調べてみよう。

☆家光はどのような政策をおこなったのだろうか？（どうやって260年の礎を築いたのか？）

第2時～第6時

徳川家光のおこなった政策について調査し、分かったことをまとめる。【知】

〈参勤交代→大名への支配〉

- ・自分の敵になりそうな大名たちを江戸にこさせることで、たくさんお金を使わせている。これだと大名たちは幕府を超える力をつけることはできない
- ・和歌山は、当時御三家として栄えている。当時の和歌山の様子についても知りたい。
- ・妻子を人質にとっているのは、ひどい！妻子はきっと不安だったと思う。

〈身分制→民衆への支配〉

- ・百姓は特権をもつ武士に厳しく支配されていた。自分たちが作ったお米などで武士の生活を守らなくてはならないのはおかしい。自分の分は自分で作ったらいいと思った。
- ・身分制は親子へと代々引き継がれたらしい。生まれた時、すでに将来の職業が決まっているのは自分だったら絶対いやだと思う。
- ・女性の地位も男性よりも低くみられる考えが強かったらしい。いつの時代も女性は弱い立場にいる！

〈鎖国→諸外国への支配〉

- ・海外の情勢や交流を独占することで江戸幕府が一番得をする仕組みになっている。
- ・キリスト教が広がると徳川家ではなくイエス様が一番偉い人になってしまう。これは徳川家にとって都合が悪いことだったと思う。
- ・自分が信じたいものを信じられないのは、ひどいと思う。私も自分の「推し」を奪われたら生きていけない！

紀州藩への興味の高まり



徳川家の繁栄によって栄える和歌山？ 我が町大調査！！

第7時～第13時

フィールドワークや市立博物館への見学を通して、江戸時代の和歌山の様子に迫り、武士による政治の支配を多角的に考察する。【思】

- ・報恩寺には、大きな徳川家の墓があった。ただ、武士と農民は入れる門がちがった。今では考えられない差別があったと思うとショックだった。
- ・当時の和歌山は大都会だったらしい。江戸時代になり和歌山はかなり繁栄したので、やっぱり江戸幕府がおこなった政治はよかったと思う。

第14時～第16時

徳川家光の政策について多角的な視点から話し合い、これからの自分や社会の在り方について考える。【思】【態】

6. 本時の目標

・家光の政策を多角的に評価し、自分の生き方やこれからの社会の在り方について考える。【思考力・判断力・表現力】

本時における目指す子供像

これまでの学習を根拠とし、他者との対話を通して家光の政策を多角的に捉え、考えたことを自身の生き方につなげていく姿。

引き出したい子供の言葉

家光の政策によって、確かに平和な世の中になった。ただ、争いがないことだけでは人は幸せにはなれないのかなと思った。やっぱり一人一人が職業などを決められることなく自分らしく生きていける社会が一番いい社会だと思う。そういう社会にしていくために、まずは自分がみんなのその子らしさを認めていく必要があると思った。

7. リフレクション

7. 1. 「生徒エージェンシーの発揮」と「社会科の親和性」

OECD が定義する生徒エージェンシーを端的に表現すると「変革を起こすための力」であると言える。子供たちが変革への意識を高め、自分の行動に責任をもって実際に行動していくためには、自身が社会に参画しているという自覚をもつ必要がある。平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の育成を目指す社会科は、社会参画と強い親和性がある教科である。北 (2015) は、「社会参画力とは単に社会の活動に参加し協力するというレベルではなく、企画・計画段階からかかわることを意味する。一人前の社会人として社会の中で活躍し、社会の中で貢献するため、すべての人に求められている」と述べている。^①「単に社会の活動に参加するのではなく、計画段階からかかわる」「社会の中で活躍し貢献するため」等は、生徒エージェンシーの概念そのものであると言える。また、『学習指導要領解説 社会科編』には、「歴史から学んだことをどのように生かしていくかなど国家及び社会の発展を考える」という記述が見られる。第 6 学年の歴史学習において「歴史から学ぶ本当のリーダーシップとは？」や「歴史から学ぶみんなが幸せな社会とは？」について考えを巡らす学習を展開したことで、いかに社会参画への意識が高まったかについて考察する。なお、本実践のリフレクションは、生徒エージェンシーの発揮の要素①「子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」の視点に立って行うものとする。

7. 2. 抽出児の変容を基にした授業分析 一座席表カルテの活用を通してー

本実践では、抽出児を設定し単元を通した「その子」の変容を評価した。このような評価方法をとる理由は「個」が望ましく成長していく過程を捉えるためである。長岡 (1983) は、「子供の切実な問題は何か」を考え、「学習をこの子から出発させる」必要性を提唱している。^②「この子」にとって切実な問題を探るためには、社会科の学習領域だけにとどまるのではなく、子供の生活の中にある問題や課題に迫る必要があると考える。下記に抽出児⑦の実践前の様子と授業の願いを記す。(※なお、子供の学びの事実からいかにして単元を構成していったかについては、二次元コードページ「座席表カルテ」「学びの足跡」「本時の学習構想」を参照されたい。)

抽出児⑦は一見すると「活発な女の子」であり男女を問わず誰にでも自分の思いを伝えることができる子供である。各行事における活動でも自ら実行委員に立候補し、持ち前のリーダーシップを発揮する姿が見られる。その一方で、木曜日のお弁当の時間には「先生と 2 人で食べたい」「みんなとお弁当食べたくない私って変かな？」といった声が聞かれた。また、放課後にも「誰も一緒に帰る子おらん。私ってみんなにさげられてるわー」と言って下校する姿が見られた。「自分らしいリーダーシップを発揮したい」という思いとそれに伴う孤独感の中で揺れ動いている様子が見受けられた。藤原道長の政治について学習した際の振り返りには、「道長はすごく頭がいい。でもこんなずるがしこい？やり方で人生成功するんやったら私もやるわ」という記述が見られた。自分のためだけでなく社会のためにリーダーシップを発揮することの良さに気付かせ、社会参画に対する意識を高めていくことを願って本単元を設定した。

7. 3. 抽出児⑦の学びの実際

本単元の実施は、第 6 学年の子供たちが最も楽しみにしている修学旅行への準備と同時期に行われたものである。抽出児⑦も朝のスピーチの時間に「日本の中心、東京に行ける。私は東京の人の多さを感じたい。流行の中心で歩いている人とかどんなファッションなんかとかもめっちゃ気になる」と発言するなど修学旅行を楽しみにしている様子であった。その一方で修学旅行実行委員には参加せず、学年会でも積極的に発言する姿は見られなかった。ただ、社会科の学習を通して（もちろん社会科の学習だけが要因とは言えないが）抽出児⑦の社会参画に対する意識に徐々に変化が見られた。下記に抽出児⑦の社会科の学びの詳細を記す。

学習問題	抽出児⑦の学びと授業者の見とり
I 厳しい支配をした徳川家光の政治とは？	・家光が行ったキリスト教の弾圧に興味をもち、調べ活動に取り組む。「もし自分だったら絶対に推しのイラストは踏めない」との発言も聞かれる。民衆の信仰の自由のために戦った天草四郎の生き方に憧れをもっているようであった。
II どの政策が効果的？家光の政策に順位をつけよう。	・参勤交代によって武士の財力を奪ったことが最も効果的な政策であったと考えているようである。「自分で好きに宗教も決めれないし、幕府のためにお金を使わなあかんとか江戸時代どんだけ不幸な時代なよって感じ」という発言も聞かれた。
III 江戸時代って悪い時代？紀州藩の江戸時代に迫ろう。	・抽出児⑦の言葉から本時の学習問題を設定する。信仰の自由がないことがどれだけ人の心を苦しめるかを自作した資料を用いて全体に問いかける姿が見られた。学芸員の方から戦国時代に命がどのように扱われていたかも教えていただく。振り返りには「厳しい政策も命の心配をしなくていいなら仕方がない。」という記述が見られた。
IV 争いが無い時代＝幸せな時代か？	・江戸時代に本当の幸せはないが、命の安全があって幸せがあると考えているようである。「世の中を治めるためには、強力な支配が必要だと思う」との発言も聞かれた。

<p>V 安定のための支配は仕方がないと言えるのだろうか？①</p>	<p>・支配がないと世の中が混乱してしまう。だから支配は仕方がないと思う。「Tさん（総合的な学習の時間にお越しいただいた戦争を経験しているゲストティーチャー）も爆弾がふってこなくて安心して寝れることが一番幸せだと言っていた。話し合いとかもみんなの意見とか聞いてたらずっと決まらんし、どんどんカオスになっていく。だから、やっぱり支配は絶対に必要」と発言する。</p>
<p>VI 安定のための支配は仕方がないと言えるのだろうか？②</p>	<p>・「強力な支配無しで平和をつくるのは大変。支配されることで、最低限の生活が送れるから支配を求めている人もいたと思う」と発言する。しかし、⑥の「でも支配をされることでひどい生活を送らされた人がいる。全体の幸せや安定のために一部の人が犠牲になるとかちがう気がする」という発言を受け、考え込む様子が見られた。</p>
<p>VII 単元を通して学んだことを振り返ろう。</p>	<p>・「Sちゃん（児童⑥）の一部の犠牲って言葉がすごく心に残っていて、やっぱりみんなを幸せにするってめっちゃ大事やと思った。はじめは歴史に出てくるリーダーってズルがしこい人ばっかで、正直嫌になってきてたけど、だから自分らはそういうリーダーにならないようにすることが大切だと思う。歴史の勉強は未来にもつながってるなってすごく思った。」（社会科ノート抽出児⑦の振り返りより）</p>

以上が、座席法カルテを基にした抽出児⑦の単元の学びの様子である。Iでは、民衆のために立ち上がった天草四郎に強く共感し、強力な支配を進める将軍家光の政治を批判的に捉えている。しかし、学芸員の方に戦国時代と江戸時代の生活の違いを伺った後は、一貫して「幕府による厳しい支配」を評価するようになる。IVとVの間に行われた修学旅行のグループを決める話し合い時には、手際よく進行を進めていく実行委員の姿を見て「一人一人の意見なんか丁寧に聞いてたら話まとまらんよな」とつぶやく様子が見られた。この思いがVでの「話し合いとかもみんなの意見とか聞いてたらずっと決まらんし、どんどんカオスになっていく。」という発言につながったのではないかと。

このような抽出児⑦の考えに明確な変化が見られたのは、VIの授業での「対話」がきっかけである。抽出児⑦の考えに変容をもたらすきっかけとなる発言をした児童⑥は、単元の当初から身分制に対して強い問題意識をもち学習を進めてきた子供である。クラス全体の意見が「戦いが無い世の中をつくるためには、支配は仕方がない」という考えにまとまりかけたときも、「でもそれって、やっぱりなんかおかしい気がする。誰かの不幸の上にある平和とかある？」と発言している。この考えに対し、激しく反論をしたのは抽出児⑦であった。「そんなんきれいごとやろ！実際、今の社会とかでも差別されてる人もいる。みんなが幸せとか無理！」と現代社会の在り方とも関連付けながら思いを語る姿が見られた。これに対し児童⑥は「でも、支配をされることでひどい生活を送らされた人がいる。（＝差別された人々がどのような生活環境に置かれていたかを自作資料をもとに発表＝）全体の幸せや安定のために一部の人が犠牲になるとかちがう気がする」と全体の幸せについて考え続ける必要性を訴えた。

自身のリーダーシップに迷いをもつ抽出児⑦、身分差別に強い憤りを感じている児童⑥、まさに「一人一人が自分の情熱を燃やし」学習に取り組んできたからこそ「真理の追求の中で、今の自分の考えや自分の現在の在り方が変わる対話」（河野（2020））がなされたのではないかと。⁹ 実際、抽出児⑦はVIの授業後に行われた学年会でも「みんなの意見全部聞くってやっぱりめんどくさいんだよ。でも、それが自分らでいるんなことするために大切やと思う。」と発言している。（図1）社会科の学習を通して徳川家光の政策を多角的な視点から判断した抽出児⑦は、実際の生活と社会科の学習を往還させながら生徒エージェンシーの概念である「変革を起こすために自身の姿を振り返る姿」を發揮しつつある。引き続き、個の思いに迫りながら社会科の実践を行い、子供たちの生徒エージェンシーを引き出していきたい。



図1 子供たちが運営する学年会の様子

7. 4. これからの実践で大切にしたいこと

対象が生きた人間である教育に一定の法則を見出すことは困難である。したがって、本実践における抽出児⑦の生徒エージェンシーの発揮に本実践の学びがどれだけ影響を与えたかについては正確には図りきることはできない。ただ、だからこそ一人一人の「個」に着目し、丁寧にその変容を追い続ける必要があると考える。どこまでいっても分かりきれない子供に迫り続けられる教師でありたい。



引用文献

- (1) 北 俊夫(2015)『教育の小径』文溪堂
- (2) 長岡 文雄 (1983)『「この子」の拓く学習法』黎明書房
- (3) 河野 哲也 (2020)『人は語り続けているとき、考えていない 対話と思考の哲学』岩波書店